

ハイデルベルク信仰問答より

問 115 それでは、誰もこの世では十戒を守ることができないのに、どうして神はそれほど厳格に説かれるのですか。

答え 第一に、全生涯のあいだ、私たちがますます自分の罪の深さに気づくようになり、それゆえ、ますます熱心に罪の赦しとキリストにある義を求めようになるためであります。第二に、私たちが絶えず、喜んで、聖霊の恵みを神に祈り、ますます一層、私たちがこの世の後に、完成の目的に到達するまで、神の^{にすがた}似像に新しく変えられるためであります。

〔別訳〕

問 115 この世においては、だれも十戒を守ることができないのに、なぜ神はそれほどまで厳しく、わたしたちにそれらを説教させようとなさるのですか。

答え 第一に、わたしたちが、全生涯にわたって、わたしたちの罪深い性質を次第次第により深く知り、それだけより熱心に、キリストにある罪の赦しと義とを求めようになるためです。第二に、わたしたちが絶えず励み、神に聖霊の恵みを請うようになり、そうしてわたしたちがこの生涯の後に、完成という目標に達する時まで、次第次第に、いよいよ神のかたちへと新しくされてゆくためです。

十戒の学びの最終回です。次回から本問答書最後の学びとなる「主の祈り」に入りますが、それに先立って、私たちに十戒が与えられている目的が確認されます。

問いの最後の部分で「説かれる」と言われていますが、別訳では「わたしたちにそれらを説教させようとなさる」となっています。私たちは十戒を守り切ることができず不完全な形で神の御心を行なおうとしていますが、その不完全な人間が人に十戒を教えなくてはならないのです。教える人とはこれを学んだ人であり、この教えを行なおうと努めている人であるはずですが、その人はある種の葛藤を心に抱きながら人に伝達している。自分自身が不完全なのに教えるという矛盾を感じるはずなのです。そのような状態に陥ることを神様は承知の上で、尚も私たちに語らせようとしています。その理由を問うているわけです。

この感覚は、牧師が聖餐式に臨むときの感覚と似ているかもしれません。聖餐式の司式とは、罪人がイエス・キリストの代理として会衆の前に立っている状態であり、司式者自らが「恐れ多さ」「おこがましさ」を痛いほど感じている時間です。そのような自分を自覚しながら、それでも背筋をシャンと伸ばして責務を果たしているのです。十戒という神の御心の真髄を宣べ伝える人も、これと同質の葛藤を覚えるに違いありません。

この問いに対する答えは二つの内容に分けられています。

第一に、全生涯のあいだ、私たちがますます自分の罪の深さに気づくようになり、それゆえ、ますます熱心に罪の赦しとキリストにある義を求めるようになるためであります。

神の御心の本質を知れば知るほど、人はそれにふさわしくない生き方をしている自分に気づくというのです。律法は聖なることばであるがゆえに、人に罪の意識を抱かせるものとなります。

なぜなら、律法を行うことによっては、誰一人神の前で義とされないからです。律法によっては、罪の自覚しか生じないのです。(ローマ 3:20)

しかし、律法の完成者であるイエス・キリストを信じる者にとって、この律法は本来の目的である福音へと人を導くものとなります。神の子とされた人は、どうしたら神に喜ばれる生き方ができるかを模索するようになるので、十戒のことばはその指標としての役割を果たすこととなります。そのことばはもはや私たちを「縛る」ものではなく、私たちを愛してくださっている神の喜ばれることを行ないという渴望を実現していくものにほかなりません。よって、その御心に反することを行なうとき、私たちは深い罪意識を覚え、心から赦しを求め、キリストの義によってもう一度神の基準に立たせていただけるように祈るのです。

第二に、私たちが絶えず、喜んで、聖霊の恵みを神に祈り、ますます一層、私たちがこの世の後に、完成の目的に到達するまで、神の似像にすぎたに新しく変えられるためであります。

「聖霊の恵み」という表現は本問答書独特のもので、聖書の中では基本的に「聖霊の賜物」「聖霊の働き」「聖霊の名」「聖霊の力」「聖霊の交わり」という表現が使われています。著者は「聖霊の恵み」という言い方によって、おそらく「ヘセド」に現れる神の一方的な恵みの契約を実現しておられるのが聖霊であることを表そうとしているのでしょう。聖霊を内に宿している人は、失敗を恐れることなく、自由に地上の生涯を歩むことができます。なぜなら、すべての罪は赦されているからです。既に義とされた者として大胆に聖化の道筋を歩んでいく。十戒はそのときに私たちの生き方を示す指標となります。地上にあっては完全な者となることはできませんが、限りなく「栄化」に近づくことを願いつつ、ステパノが主イエスと同じことばをもって殉教したように(使徒 7:60)、私たちも人の罪を全く神に委ねる者として歩み抜くことができます。それこそが「神の似像」であり、神に似せて造られた人間が本来の姿を取り戻した状態と言えるでしょう。

以上をもって、十戒の学びを終えます。義とされた私たちが聖化の歩みを生涯の終わりまで続けていけることを願いつつ。